正岡子規とその「友」のゆかりの地を訪ねる旅

愛媛県松山市立生石小学校
石丸真理子

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

『ひろがる言葉　小学国語6上』に取り上げられているこの俳句の作者正岡子規は、慶応三年九月一七日（一八六七年一〇月一四日）、今の松山市で生まれた。松山市には「人間正岡子規」を感じることのできるスポットがたくさんある。今回は、子規ならびに、子規と生涯変わらぬ友情で結ばれた二人の人物「夏目漱石・秋山真之」にゆかりの地を訪ね、若き日の子規に思いを馳せたいと思う。

子規堂

伊予鉄道松山市駅南口を出て左に折れて、末広町通りに沿って歩く。三分ほどで右手に「正宗寺子規堂」という石の看板に出会う。子規は温泉郡藤原町（現在の松山市花園町）で生まれ（誕生地の碑あり）、湊町四丁目に転居した。そして、一七歳で上京するまでそこに住んでいた。子規堂は、文学仲間であった正宗寺住職仏海禅師が子規の業績を記念して、居宅の一部を寺の中に再建した建物である。

堂内に入ると、左手に三畳ほどの勉強部屋がある。天井もない粗末なものであるが、子規はここで庭の桜の老樹を見ながら勉学に励んだという。そのせいか、この部屋で作った文章には、みな、桜に因んだ雅号を用いている。

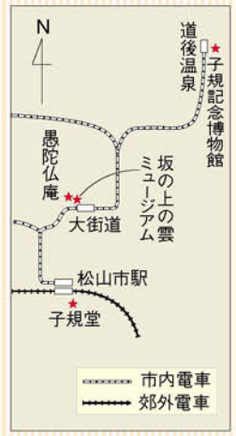
子規堂前には、小説『坊っちゃん』（夏目漱石作）でも有名な「坊っちゃん列車」の客車がある。子規と漱石は、この列車に乗り道後温泉に頻繁に通ったという。小説の中で漱石が、「マッチ箱のような汽車」と表現している客車の中で、二人はいったいどんなことを語り合っていたのだろう。そんなことを思いながら、二人が共同生活していた地へと向かうことにする。

愚陀仏庵

伊予鉄松山市駅正面玄関前から「坊っちゃん列車」に乗り込む。花園町にある子規誕生地跡を左手に見ながら、松山城下をレトロな列車は汽笛を鳴らしながら走る。「大街道」で下車し、城山側を西に一分ほど歩くと、右手奥に萬翠荘（愛媛県美術館分館・郷土美術館）の門に出会う。この門を通り抜け、道なりに登っていくと「愛松亭跡」の石碑が目に飛び込んでくる。

明治二八（一八九五）年四月、英語教師として旧制松山中学校に赴任した夏目漱石は、ここにあった家老屋敷（上野家）の離れに下宿する。小説『坊っちゃん』の題材となった「愛松亭」である。石碑の横には、「愛松亭」から東京の恩師に着任の報告をした書簡が記された碑文もある。

さて、目的地にたどり着くまでにはもう少し歩かなければならない。豪華で瀟洒な萬翠荘の前を通り過ぎ、裏手の小道を登っていくと、ひっそりとした木立の中に、その建物は突然現れる。



「愚陀仏庵」は、漱石の下宿を復元したものである。漱石の雅号である「愚陀仏」に因んでその名がつけられた。

明治二八（一八九五）年八月、上京していた子規は松山に帰省した。漱石は、親友である子規が故郷で療養し始めたことを知り、ここでの生活を勧めた。八月から一〇月までの五〇日余り、子規は一階で、漱石は二階で共同生活をしていた。ここでは、毎晩のように句会が開かれ、子規の影響で漱石も俳句を作るようになったといわれている。

桔梗活けてしばらく仮の書斎哉　子規

愚陀仏は主人の名なり冬籠　漱石

これが子規最後の帰郷となる。この後再び上京するが、その途中大阪や奈良に立ち寄った。冒頭の句は、その際作られたものである。

坂の上の雲ミュージアム

「愚陀仏庵」を後に、もと来た道を下ると、現代的な外観をもつ建物に出会う。小説『坂の上の雲』（司馬遼太郎作）と明治の日本をテーマにした博物館「坂の上の雲ミュージアム」である。

この小説の主人公は、松山で生まれた正岡子規と秋山好古・真之の兄弟である。そして、真之は子規と同じ勝山学校、松山中学に通った幼なじみである。また、柳原極堂著『友人子規』には、真之は子規と「同郷の小学校時代からの親友」とある。子規自身は『筆まかせ』の中で、真之を「剛友」と呼んでいる。

二人は、上京後も親交を深め、約三か月間子規の下宿で同居していた。明治二一（一八八八）年には、鎌倉へ無銭旅行をするほどの仲のよさであったらしい。ミュージアム内では、松山で過ごした少年時代や、それぞれの道を歩み出した青年時代を遺品やパネルで紹介している。互いに進む道は違っていたが、一つの目標に向かってひたむきに進んでゆく二人の姿が目に浮かぶようである。

子規記念博物館

旅の終わりは温泉で疲れを癒したい。そんな思いを抱いて「大街道」から再び「坊っちゃん列車」に乗り、「道後温泉」を目ざす。しかし、最後の目的地には「人間正岡子規」を知ることができる最大の切り札が待ち受けている。

伊予鉄道後温泉駅を降りると、右手に道後公園が見える。その公園の横に「子規記念博物館」は存在する。

館内は全体を貫くストーリーをもったテーマ展示で構成され、子規の世界を十分堪能できるようになっている。また、「なるほどしきさん」と称されるガイドシートがあり、小学生でも楽しく子規の生涯を追体験することができる。

最後に、博物館前の石碑に目を移すと、病床の子規が詠んだ和歌に胸が締めつけられる。

足なへの病いゆとふ伊豫の湯に
飛びても行かな鶯にあらませば

人生の終わりを予感した子規の脳裏を駆けめぐったのは、やはり故郷の温かさだったのかもしれない。

参考文献
『そこが知りたい　子規の生涯』土井中照　アトラス出版
『るるぶ愛媛　道後温泉　松山'08』JTBパブリッシング
『まっぷるマガジン　愛媛松山・道後温泉・宇和島・しまなみ街道'08』昭文社
パンフレット　坂の上の雲ミュージアム
ガイドシート「なるほどしきさん」子規記念博物館